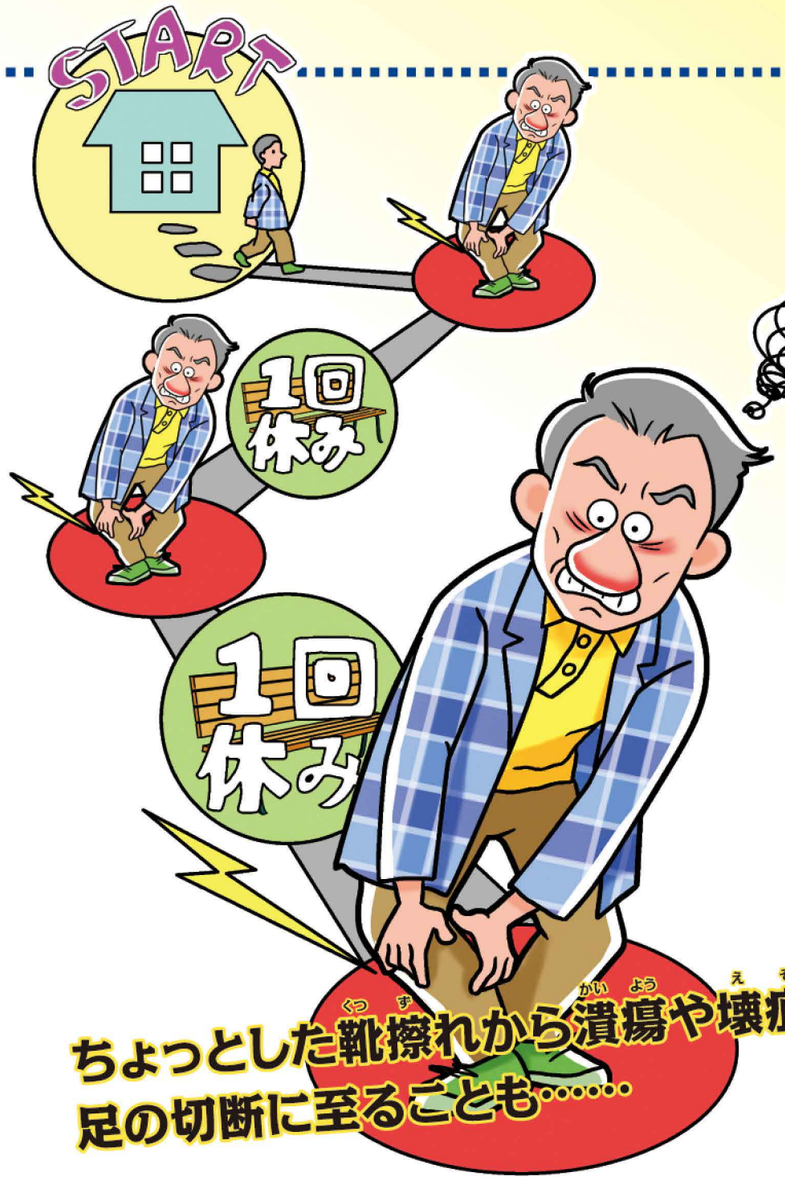
特集

ありふれている怖い足の病気——

末梢動脈疾患（まっしょうどうみゃくしっかん）

ちょっとした靴擦れから潰瘍や壊疽を招き、足の切断に至ることも……



取材協力　守矢英和部長・湘南鎌倉総合病院腎臓病総合医療センター腎免疫血管内科

治療を受けている患者さんは1%にも満たない

「足がちょっと冷たく感じる」

「足に軽いしびれや痛みを覚える」

「歩行中にふくらはぎや太ももなど、足の筋肉が痛み出して歩けなくなる。少し休むと再び歩き出せるものの、その繰り返しで辛い」

「じっと動かないで安静にしているのに足が痛む」

こんな症状に悩む中高年の方は少なくありません。

「動脈硬化の進行から足の動脈が狭くなったり詰まったりして、血液の流れが悪くなる末梢動脈疾患という病気かもしれません」

こう警鐘を鳴らすのは末梢動脈疾患の診断と治療のエキスパート、湘南鎌倉総合病院の守矢英和部長（腎臓病総合医療センター腎免疫血管内科）です。

「末梢動脈疾患の患者さんは国内でおよそ400万人以上と推定されますが、医療機関で治療を受けているのはそのわずか1%、4万人にも満たないといわれています」

取材・文／松沢 実・医療ジャーナリスト

患者さんの総数と治療を受けている患者数との乖離が甚だしく、無治療の患者さんが圧倒的多数を占める代表的な病気の一つです。

血行を再建する血管内治療や外科的バイパス手術

乳酸が足の知覚神経を刺激し足の痛みなどを招く

「狭心症・心筋梗塞や脳梗塞は、動脈硬化の進行で心臓や脳の動脈が狭くなったり詰まったりして起きる動脈硬化性の病気です。それと同じことが足などの末梢の動脈に起き、血流の悪化を招くのが末梢動脈疾患なのです」

かつて閉塞性動脈硬化症（ASO）とか慢性動脈閉塞症とかと呼ばれていましたが、いまは国際的な末梢動脈疾患（PAD）という病名で統一されています。

「末梢動脈疾患は稀に腕の動脈に発症することもありますが、その大半は足の動脈で生じます」

末梢動脈疾患で足の動脈の血流が悪化すると、足の筋肉に十分な血液を送れなくなり、同時に筋肉の活動で生じた乳酸がそのなかに溜まりやすくなります。

「この乳酸が足の知覚神経を刺激するので、足のしびれや痛みなどの症状を引き起こすのです」

進行の果てに潰瘍を招いたり壊疽を起こすことも……

末梢動脈疾患の重症度はフォンテイン分類によって、1～4度までの4段階に分けられます。

「かすかな足の冷感やしびれ、痛みなどを覚えることもありますが、ほとんど無症状なのがフォンテイン分類の1度とされます」

歩行中に足が痛み出して歩けなくなるが、しばらく休むと再び歩行可能になるのを間欠性跛行と呼び、この間欠性跛行が生じるとフォンテイン分類の2度と判断されます。

「歩行中に足が痛み出すのは筋肉の活性化で乳酸が一挙に増大し、足の知覚神経を強く刺激するからです」

末梢動脈疾患がもう一歩進行すると足への血液補給が滞り、じっと安静にしていても常に足先が痛い安静時疼痛に悩まされます。この安静時疼痛が生じたらフォンテイン分類の3度です。

「さらに進行すると足に必要最低限の血液が送れなくなります。そうなると酸素と栄養の欠乏から、靴擦れなど足の些細な傷がただれて潰瘍を招いたり、足先の組織が壊死して腐り始め、黒色に変わって壊疽が起きたりします。潰瘍や壊疽が生じるとフォンテイン分類の4度とされます」

フォンテイン分類の3度と4度は重症虚血肢と呼び、適切な治療を受けないでいると足の切断に至ることもあります。

びっくり——重症虚血肢の5年生存率は大腸がんより劣る

残念なのは末梢動脈疾患が狭心症・心筋梗塞や脳梗塞と同じ動脈硬化性疾患にもかかわらず、「生死にかかわらない軽い病気」と誤解されていることです。

「なによりも動脈硬化の進行が足だ

●末梢動脈疾患の重症度——フォンテイン分類

分類	出現する症状	
第1度	足のしびれや冷え、痛みが生じるときもあるが、ほとんど無症状	
第2度	間欠性跛行。歩行中に足が痛み出して歩けなくなるが、少し休むと再び歩き出せる	
第3度	安静時疼痛。じっと動かないで安静にしていても足が痛い	重症虚血肢
第4度	足の些細な傷から潰瘍や壊疽が生じ、足の切断に至ることも……	重症虚血肢